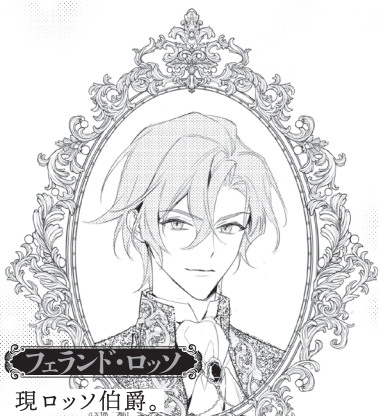


巻き戻り令息の脱・悪役計画
1

Characters

Makimodori reisoku no
datsu-akuyaku
keikaku



フェランド・ロッシ

現ロッシ伯爵。
優れた容姿と社交的な性格から、
誰からも慕われる人気者。



シルベルト・ロッシ

イレネの実子で、
オルフェオの義弟。
兄様大好きな甘えん坊。



アムレート

オルフェオと
契約した
謎の白い子猫。



イレネ・ロッシ

フェランドの後妻。
繊細な美貌の持ち主だが、
芯はしっかりしている。



ラウル・アランソーネ

大商会の子息で天才児。
とにかく商売が大好きで
抜け目ない性格。



アレシオ・ブルノ

乙女ゲーム「天使と愛の輪舞を」
の攻略対象の一人。
とてもイケメンで能力もチート級。
ゲーム本編では荒れた生活をしていたが、
オルフェオの前には優秀な執事として現れて……!?

オルフェオ・ロッシ

ロッシ伯爵家の嫡男で、
乙女ゲーム「天使と愛の輪舞を」の悪役令息。
巻き戻りをしたときに日本人である
「俺」の人格が入ったことで
狡猾さとしぶとさが増した。
懐に入れた者には優しく、
敵には一切容赦しない性格

プロローグ

「げ、俺の顔が可愛い」

全身鏡の前で思わず口走ったら、声まで可愛らしかった。

眉を顰めると、やたらピラピラした寝間着姿で立ち尽くす目の前の赤毛美少年も、小生意気な感じに眉を顰めている。

やはりこれは俺の姿で間違いないようだ。明らかに声変わり前だが、何歳ぐらいだろう。

その俺の背後には、豪華な装飾で彩られた柱や壁、壁に取り付けられた複雑なデザインの燭台が映っている。

今ほどの蝋燭にも火はなく、暗くなり始めた頃に担当の者が灯して回るのだ。この世界では電気がまだ発明されていないから……この世界？

どこだここ、と思いながら見回すと、すぐ横に大きなベッドがデンと構えていた。さつきまでそこに寝ていて、自分の身体に違和感を覚え、「あれ？」と首を傾げながらぼんやり絨毯の上に下り、姿見の前に立ったのだった。

ここはどこ？ 俺は誰？ ——そう思った瞬間、名前が頭に浮かんだ。

「オルフェオ・ロッソ？」

その名前は知っている。かつて俺の脳内で、不憫^{ふびん}ランキング一位に輝いていた乙女ゲームのキャラクターだ。そいつが縮んだら、まさにこういうお子様になるに違いない。

「どういふことだ、これ……」

眉根を寄せ、腰に手を当てる考え込むと、鏡の中の美少年も完全に同じポーズを取った。

小生意気な感じが可愛くて気が散る。とりあえずそちらは見ないようにして、改めて今の状況を整理してみた。

『俺』は日本人。性別は男。多分アラサー。名前や家族構成、過去の記憶その他は、部分的に霞^{かすみ}がかかっている。

鮮明に浮かび上がる記憶は、とある乙女ゲーム関連の記憶だ。

ヒロインが複数のイケメンを攻略していく女性向けのゲームについて、なんだって男の『俺』が詳しくあったかといえば、仕事だ。

つまりユーザーじゃなく開発側の人間で、リリース前のチェックで一通りプレイしてみた。

業界外の知人に「男が乙女ゲームなんてキツくない？」と訊かれたこともあるが、仕事でやっていれば誰もそんなことは気にならなくなる。少なくとも『俺』の職場では皆そうだった。

男も女もBL、百合なんでもござれ。モザイク入りのスチルが一枚もない純愛を描いたゲームなんて、ピュアでいいじゃないか。

それにぶっちゃけ、『俺』の恋愛対象は男。受け身になりたい側だけど、ゴリラ然としたガチム

チマッチョは苦手。現実には存在しないであろうキラキラ美形と、疑似恋愛を楽しめる乙女ゲームは好物だった。

田舎の両親の「嫁はまだか」攻撃が年々鬱陶^{うつとう}しくなり、この性癖を打ち明けたらあつさり絶縁。一時は落ち込みもしたけれど、比較的オープンに受け入れられる都会の空気感のおかげで、すぐ気が楽になった。

人間関係に疲れて田舎に移住する、なんて奴が周りにいたら、その肩をポンと叩いて、閉鎖的な田舎の人付き合いを舐めるなよって忠告してあげたっけな……。両親が『俺』を切ったのは、保守的な年寄りが幅を利かせているコミュニティから弾かれるのを恐れたからだろうし。

職場では男女の別なく、好みの攻略対象の話で堂々と盛り上がった。

同僚に若い人間が多かったのと、全体的にそういうのを気にしない風潮のおかげで、リリース直前の繁忙期^{デスマーチ}さえなければ、実に快適な職場環境だった。

上の人間に乙女ゲームユーザーを見下しかかる奴がいなくて、だいたいのゲームはコケずに人氣が出たのもよかったんだろうと思う。

ただ残念ながら、細かい分岐を含めてストーリーを全把握しているもんで、出来がいいとわかっているのに自分ではそのゲームで遊べないジレンマがあった。

それ以外にも、リリース日が近いのにデスマーチのゴールが見えず、時計と胃薬と栄養ドリンクを見比べて吐き気を催した記憶のこびりついているゲームなんかもうね……

まあ余談はさておき、そんな『俺』にとって最も印象に残ったゲームは、『天使と愛の輪舞^{ロンド}を』

だった。

まず、攻略対象の中に、人生初の推しができた。

いくら好物でも乙女ゲームのヒーローを推すのは負けた気がして嫌、という変なこだわりが吹っ飛ぶぐらい推せた。

ダークブラウンの髪に鳶色とびいろの瞳の、憂いを帯びた危険な香りのするクール美形、アレッシオ・ブルノ。細マッチョで見事に割れた腹筋に視線が釘付けになり、危うくゲームキャラ相手に本気で恋をしそうになった。

性格がS寄りなくせに、好きな相手には激甘つていう設定もツボなんだよな。

しかも声優が重低音の、これまた超絶『俺』好みの声で、開発側の人間なのに課金やらグッズやらに給料をとかしそうになって、本当に危なかった。

それから、「なんかすごく気の毒だな」という意味で一番印象に残るキャラがいた。

派手な緋色の髪と瞳の、眉を吊り上げれば気の強さが十割増しになる青年。

メインもメインの、メインキャラだ。こいつがいなければゲーム自体が成り立たない、それほどの重要人物。

趣味は爆買い、敵は質素儉約。時にヒロインを陥れ、時に攻略対象を陥れ、愛のために物語を盛り上げるだけ盛り上げて退場するのが役目。

そう、悪役だ。その名を、オルフェオ・ロッソという。

とうとう年貢の納め時が訪れた彼は、涙ぐむヒロインに「あなたには人の心がないんですか？」

となじられ、王女を守る騎士のごとき五人の攻略対象から糾弾され、罪状をひとつひとつ読み上げられた。

そして「ふざけるな、俺を誰だと思っている！」と喚わめくばかりで一切非を認めなかったため、情状酌量の余地なしと牢獄に放り込まれ、つい先ほど命を落とし、目覚めてみればなんと子供の姿に戻っていたのである。

……………ん？ どういうわけだ？

おかしいぞ。もう少し整理してみよう。

『俺』の名前はなんだ？ ……わからない。

俺の名前は？ ……オルフェオだ。

オルフェオと名付けられ、育ち、好き放題やって、そして死んだ。

俺が、オルフェオだ。俺の中に、『俺』がいる。

……なんだこれ。『俺』が俺に転生した？

だとしたら、オルフェオとしての人生の記憶が既にあるのはなんでだ。

牢の中で何があつてこうなった？

「——あつ!? まさか、これが攻略本か……!?」

思い出した! そうだ。俺に二回目の人生を与えた奴がいる!

その時、そいつは言っていた。サービスだど。

『俺』が、これこそが、オルフェオの二回目の生に与えられた特典なのか……!?

第一章 怪物の生まれた理由

舞台となるアルティスタ王国は、基本的にファンタジー要素のないいくつもの国々が存在する大陸の中で、国土の南が海に面し、GDPがそこそ上位に入りそうな富裕国だ。

周辺諸国はどれも安定した気候と豊かな資源に恵まれ、長いこと小競り合い^{こせりあひ}すらない。

国民の名前はイタリア風。国民性はどちらかといえば陽気で、特に男は他国と比較して情熱的と言われていた。比較すれば全体的にそういう傾向があるというだけで、じめじめ陰湿な人間も普通にいるし、淡泊な男や気難しい男だっていないわけではない。

そんなアルティスタ王国の貴族の中で、ロッソ伯爵家の当主は代々気が強く、頑固な変わり者が多いことで知られていた。しかし当代のフェランド・ロッソは珍しくも人当たりがよく、魅力的で社交的な人格者として有名だった。

歴史も財力も抜きんでているロッソ家の頂点であり、優れた容姿と知的な会話で上流社会の人気をほぼ独占していたのだが、そんな彼の唯一の悩みが、後継者たる息子の出来。

父親に似ず頭の悪さと性格の悪さで有名な嫡男、その名をオルフェオ・ロッソという。

——つまり俺な。

「おまえの新しい母親と弟だ。仲良くしてあげなさい」

九歳の春。ロッソ伯爵領の本邸に、父フェランドが金髪碧眼の美しい女性を連れて来た。

彼女の足もとには母親そっくりな金髪碧眼の、俺より小さな子供がくっついていて。

女性の名はイレネ、子供の名はジルベルトといった。

イレネは元子爵夫人だったらしい。数年前に夫が他界し、小さな息子を抱えて困窮していたという。俺は何かの用事で訪れていた客人に『ここだけの話』を吹き込まれ、彼女のことを財産目当てでロッソ家に入り込んだ悪女に違いはないと思ひ込んだ。

まあそんな話を、わざわざ子供の耳を狙って吹き込むお客様の魂胆なんぞろくなものじゃないが、カッカした子供の頭はまんまとそれに引っかかったわけだ。

「薄汚い女め、この家から出て行け！ そんなアバズレ女の息子なんか近付けるな、汚らわしい！」

異物を許容できない潔癖な子供は、母子^{おやこ}を徹底的に虐め^{いじ}抜いた。

嘲笑^{あざわら}い、罵倒し、物を投げつけ、「寄生した貧民^{あまた}ごときが贅沢^{ぜいたく}をするな！」と衣装を裂き、持ち物を無断で処分した。

翌年に妹シルヴィアが生まれ、虐め^{いじ}はますます酷くなった。

やがてイレネは心労が祟^{たた}って倒れ、それきり二度と目覚めなかった。

守ってくれる者のいなくなったジルベルトは、俺に対して恐怖だけでなく、媚^{こび}の視線も向けるようになった。自らを守るために、へりくだって俺を持ち上げようとする義弟^{おじょうと}に、俺は嘲笑^{あざわら}を浴びせた。下賤^{げせん}な女の息子はやっぱり下賤^{げせん}なんだなど。

彼女の死をなんとも思わぬまま、俺は学園に入学した。

この国の貴族の子女は、十二歳の春になると王都の学園に入る義務がある。入学に合わせて俺だけが領地の本邸から王都邸に移り、しばらく目障りな者がいなくて快適だと喜んでいたので、父の意向でジルベルトとシルヴィアまで移ってきてしまった。

再び荒れ狂う日々が始まる。しかも、翌々年に入学したジルベルトが常に好成績を取り、高い評価を得ていると聞こえ始めた。

生意気な。許せない。——おまえごときが。

「出て行け、クズども！　いつまでここにいろんだ！　さっさと消えてしまえ！」

ジルベルトは成人となる十六歳の誕生日を迎えたその日のうちに自主退学の手続きを行い、シルヴィアを連れて家を出た。

父は目をかけていた優秀な義息子^{むすこ}のほうが無断でいなくなってしまう、裏切られたような残念そうな表情を浮かべ、そして原因となった俺に失望のまなざしと溜め息を贈ってくれた。

好き嫌いの感情を激しく表に出し、まったく勤勉ではない実子に彼が期待を寄せていなかったのは誰の目にも明白で、その事実はずます俺を苛立たせた。

それからさほど経たずに父もまた病^{やまい}でダウンし、跡継ぎ息子の俺に領主代理の役割が求められた。学園に通いながらいきなり激務が降りかかり、うんざりした俺はほとんどの仕事を取り巻きに押し付け、以前のように——いや、それまで以上に遊び歩き始めた。唯一俺に命令できる存在だった父が療養のため遠くの別邸に引っ込んだことで、解放感に酔いしれていたのだ。

領地にはほとんど戻らず、王都で自由気ままな暮らしを満喫している俺のもとに、珍しくジルベルトが訪れた。

何かと思えば、金の無心だった。

「はっ、落ちぶれたものだ。この臭いゴミを放り出せ。同じ場所で息を吸うのも不快だ」

ほとんど口をつけていなかった酒杯の中身をジルベルトの顔めがけてぶちまけ、赤ワインで頭から血を流したような姿になった彼を、使用人に命じて追い出させた。

そして、二度とこの屋敷に足を踏み入れさせると命じた。ろくに事情も聞かぬまま。

しばらくして俺は趣味の爆買い中に、大通りで騎士団に拘束された。どうやら知らぬ間に、ロツソ伯爵領は滅茶苦茶になっていたらしい。

災害や、それに伴う飢饉^{ききん}が発生。にもかかわらず、俺の部下がろくな対処をしなかったために、随分と死者が出ていたそうだ。

おまけに俺は取り巻きに言われるがまま、内容の吟味をせず署名を乱発していた。そのせいで、いつの間にかオルフェオ・ロツソは、違法な薬物の原料となる植物の栽培とやらで懷を潤わせていることになっていた。

「この俺が!?　ふざけるな!!　俺のせいじゃない!!」

まあ誰も信じやせんわな。本人の直筆サインが「どうぞ証拠ですよ」とばかりに残りまくっているんだから。

後ろ手に縛りあげられ、往来で膝を突かされた屈辱に歯ぎしりをしながら睨^{にら}み上げる俺の前に、

悲しげな瞳の清楚な娘がずっと歩み出た。

彼女の周りには騎士のごとき五人の青年が立ち、こちらは厳しい顔つきで俺を見下している。その中にはジルベルトの姿もあった。

「どうして……どうしてあんな、酷いことができるんですか。あなたには、人の心がないんですか……？」

娘の瞳に涙が滲^{にじ}んだ。それを皮切りに、五人の男の糾弾が続いた。

義弟^{おとうと}のジルベルトが。

気弱さを捨てた子爵家の息子が。

鬼才と名高い男爵家の息子が。

未来を見据えた公爵家の息子が。

未来を奪われた男の息子が。

完璧で疑いようのない、俺の罪の証拠とやらを次々と突きつけてきた。

あの放蕩息子ならやりかねない。いつかやるだろうと思った。そんな空気の中、形ばかりの貴族裁判で有罪は速やかに確定し、幼い頃から悪童で知られたロッソ家の嫡男は、予定調和のごとく檻の中に放り込まれた。

——地下牢は暗く異臭がして、気の滅入る恐ろしい場所だった。

どう見ても残飯でしかない食事が日に一回。初日にそれを憤りのまま看守めがけて投げつけ、あつさり避けられた上に、翌日は食事抜きにされた。看守はニヤニヤ笑いながら、昨日囚人がぶち

まけた食べ物をつまみ、「そら大、食えよ」と檻の中に放り込んだ。

カッとなって投げ返した俺に、看守はゲラゲラ嗤^{わら}うだけだった。その男は知っていたのだ。最初だけ威勢の良い罪人が、いずれどう変わり果ててゆくのかを。

どうせすぐに出来るかと高をくくっていた牢生活が、一ヶ月に及んだ頃だろうか。

与えられた残飯もどきを、床に蹲^{うずくま}ってガツガツ食っている最中に、ジルベルトが訪れた。

「いいさまですね、義兄^{あに}上。嬉しいですよ、高貴なあなたの這いつくばっているお姿が見られて」俺は器をのろのろと床に置き、かつての義弟^{おとうと}を牢の中から見上げて、そのまま動けなくなった。わずかな蝟^{うそうそ}燭の灯りの中、ぼんやりと作り物めいた顔に不自然な微笑を浮かべた彼が、心底恐ろしく見えたのだ。

抑揚のない冷やかな声で、ジルベルトは語った。

彼は妹とともにロッソ家を出て、ようやく穏やかな日々を手に入れたと思った。しかし恐ろしい義兄^{あに}が領主代理になった直後、それはあっけなく壊れた。

夏の名残^{なごり}が色濃く残る季節、嵐で勤め先の商家が深刻な被害を受け、ジルベルトは職を失った。さらに食糧不足と増税がロッソ領全体の貧困に追い打ちをかけ、不義理を働く形になった義父^{ちち}から金銭的な援助を一切受けていなかったのもあり、蓄えはすぐ底をついた。

そんな中、もともとから身体の弱いシルヴィアが病^{やまい}にかかった。

彼は妹の葉代を欲し、恐怖と憎しみの権化たる義兄^{あに}に頭を下げる決意をしたが、まるで話を聞いてもらえず、ゴミ呼ばわりとともに放り出されてしまった。

この時点で先の展開が読め、俺は耳を塞ぎなくなってくるが、震える手に力が入らず、床に置いた器からどうしても離すことができない。

そうして最後まで聞かされた現実、俺の予想より遥かに悲惨なものだった。

俺のお友達とやらが、面白半分で警官隊に金を握らせ、ジルベルトを拘束させたのである。一ヶ月ほどで解放してもらえたものの、彼が慌てて帰宅した頃には、妹はもう共同墓地の片隅に、身元不明の亡骸なきがらと一緒に葬られたあどだった。

妹の世話を頼んでいた者が、ジルベルトが予定日を過ぎても戻らず連絡もよこさないため逃げたと勘違いをし、他人をタダで養う余裕はないと見切りをつけたのだ。

取り返しのつかない結末の数々が丁寧に紡がれ、永遠のようなその時間が——実際はほんの十分に満たない面会だったようだが——終わる頃には、俺は芯から冷え切っていた。

「義父ちちうえ上もあなたの所業に随分心を痛めておられました。あなたがこちらに住まいを移してから快癒したそうですが、不思議なこともあるものですね？……そのうち頃合いを見て私を呼び戻してください。くださるおつもりだったようで、私は籍を抜かれておらず、このたび愚息の責任を取ると、私に爵位を譲っていただけることになりました」

この国の貴族は、原則として養子には相続権がない。しかし伯爵以下の身分であり、かつ再婚相手の連れ子であれば例外として認められる。

さらに、長子に看過できない瑕疵かしがあると見做みなされた場合、後継者を弟に変更することもあった。だから俺が自分の立場を奪われまいと焦り、父上に何かをしたのでは……とでも疑われていそう

だな。そんな覚えはまったく否定したところで、信じてもらえそうにない。

父は伯爵位のほかに、子爵位も持っていたようだ。ロッソ領の端の一部が子爵領で、全体から見ればささやかな土地に過ぎないが、今後はそこで慎重しく過ごすのだという。

ずっとその別邸で療養していたのだから問題はない、自分のことは気にしなくていいと、義息子むすこの肩を安心させるように軽く叩いて。

「私はあなたが敵対していた公爵家からの覚えもめでたくなり、諸々の手続きはつつがなく進みました。あなたがいなくとも、この愚弟がちゃんと領地を立て直しますので、どうかご安心を」

「……………」

敵対していた、公爵家。……って、なんなんだ。知らないぞ、ほんとに。

しかしどんな言葉も無意味だと悟った今、俺が口をひらくことはなく、ジルベルトもそれを期待してはいなかった。

「あなたは一生、死ぬまで、ここにいます。せいぜい絶望して苦しみ抜いてください。可愛い義弟おとうとからの、最後のお願いです」

底冷えのする薄笑いを残し、ジルベルトは帰っていった。

その足音が完全に消えてもなお、俺は顔も身体も凍り付いて、しばらく動くことができなかった。その数日後、別の男が現れた。身なりは質素だが、暗がりでもぞつとするほど美しい男は、あの娘を守っていた五人の騎士の一人だった。

男は床に蹲うつすまる俺を見下ろし、面会を許された時間ギリギリまで黙っていた。そして去り際にぼ

つりと言った。

「父を殺した者の末路を、目に焼き付けに来た」

——俺は牢の中で考え続けた。腹を苛む空腹感と、その時になってようやく芽生えてきた罪悪感や絶望感で潰れそうになりながら、それでも過去の己を振り返り始めた。

皮肉な話だ。そうやって考えることこそが、ずっと俺に足りなかった一番重要な部分だったのだから。

そしてやっと、答えが出た。

「……俺が悪い」

自業自得。どう足掻いてもこの結論しか出ない。

やりすぎだろう、明らかに。まるで凶暴な獣じゃないか。

なんで俺はあそこまでやれてしまったんだ。

今となつては理解できない自分自身の行動に呆然とし、朝も夜もわからない日がさらに続いた。

日に一回だけ与えられる食事の回数で無意味に一日の経過を判断しつつ、頭はぼんやり過去を揺蕩い、時間だけが消えていった。

「てめえはもうすぐ鎖かけられて、広場まで引きずられてって、ごつい斧で首を落とされるんだよ。おら、想像してみろよ。広場にや、てめえが豪華なメシを山ほど食い残してる間に、土くれ齧って生き延びてた奴らがごまんと待ち構えてくれてるんだぜ。あんまり歓声がすぎえと、処刑人の手元が狂っちゃうかもしれないねえな。失敗したらさぞかし苦しいだろうなあ！」

「……………」

「……ちっ。反応鈍くなってやがる。つまんねえ」

があん！ と檻を蹴り、看守が去ってゆく。

死なない程度の食べ物、かろうじて俺の命だけを繋ぎ、それ以外のものは容赦なくどんどん削ぎ落としていった。

だからこの檻の中に、いつの間にか白い子猫がちょこんと座っていても、たいして驚きもしなかった。

『いやいやいや、驚こうよそこは！ んもー、こんなかわゆい子猫ちゃんがいるつてのにさー、反応薄くてつまんないよー』

石床の上にぐったり横たわる俺の顔の前で、子猫は細い尾を揺らしながらプリプリと怒った。

おまえ看守と同じことを言うんだな。うまく反応できなくて悪かった。

でも、もうそんな気がないんだ。身体も動かない。

『そこで謝られてもねー。つうか、あのきつたないおっさんと同じにしないでほしいなあ。あいつ腹ん中ドツロドロよ？ さも自分はカワイイソーな民衆の味方っぽいコト言ってたけどさあ、あれ単に弱い者イジメ好きなかだけだから。抵抗できないヤツをいたぶるのが趣味なだけだから』

そういえば、子猫と会話が出来るなんて変だな。

とするともしや、これが噂の幻覚とやらか？ 初体験だ。

幻覚ではなく死神のお迎えかもしれない。

笑みを浮かべようとして失敗した。口が動かない。食べ物がそこにあれば、勝手によく動いてくれる口なのに。

このところ全身が重愈いし、妙に眠い。おまけに今日だか昨日だかは、看守がむしゃくしゃしていたようで、何度も蹴り飛ばされた。そのせいで発熱しているのかもしれない。

『死神じゃあないよ？ んっふっふ、聞いて驚け。なんと僕は悪魔なのだー！』

可愛い悪魔だな。死ぬ前に面白い夢が見られて和んだよ、ありがとう。

『反応が微妙！『ありがとう』じゃなくてね？ 本物だからね？ 平伏してなでなでするがいい！……って無理か。うーん仕方ない。ホントもう終わり近そうだし、さっさと契約済ませちゃう。——オルフェオ・ロッソ。おまえ、やり直したい？』

薄氷色の目が、俺の目を覗き込んできた。その瞳孔は縦に細い。

やりなおし？ ああ、そうだな。やってみたいな。できるものなら。

選べるものなら、あの逆を選んでみたい。

継母を金切り声で罵ったりはせず、不安そうな義弟の話をちゃんと聞いてやって、妹の誕生も祝ってやる。

俺はそうすべきだった。己の感情がどうであらうとも。

『じゃあ、やり直し希望ってこといいね？ 代償として命捧げてもらっちゃうけどいい？』
そうだな。

あの日から今日までずっと間違えてきた、さまざまなことをやり直してみたい。

まあ、できるものなら、だけれど。

『ハッハッハッハッハ！ できるさ！ できるとも！ 契約は成った！ また会おうオルフェオ・ロッソ、我が新たな契約主よ！』というわけで子猫ちゃんからの特大サービスの特典だ！ その名も攻、略、本！ 今のおまえが始まって終わるまでのすべて、知らないトコまでいいーっぱい網羅してる素敵な一冊だよ！』

……備忘録？

『ちがぁーう！ 攻、略、本！ 基本は大事、灯台下暗し、敷の中に踏み入るか、活かすも殺すもおまえ次第！ 使い方はすぐわかるようになってるからね！ じゃ、健闘を祈る！』

子猫がしゅたつと片手——片前足を上げると同時に、俺の瞼は急激に重くなり、視界が薄暗くなっていく。

にゃあん、と可愛い声にこびりついた。



以上、とある悪役令息の、一回目の人生である。

やはり『俺』はオルフェオの前世ではない。妙な縁で『オルフェオ』に憑依させられたのか、どこからか記憶だけを持ってきて移植されたのかはわからないが、少なくとも人格は確実に『俺』成分多めで統合されている。

最期の頃は精神的にだいたい**はかな**くなっちゃってたから、自我の強い『俺』に負けて染め上げられた感じだな。

「というか、俺よ。おまえ何やってんだ？」

軽々しく署名しまくったせいで、あのどうしようもない結末を迎えたんだぞ？」

最期のダメ押しに謎の猫と契約を交わすとか、おまえは学習せんのか？」

頭を抱えた。幻覚でも詐欺でもない証拠が、今ここにいる俺。こんな真似を現実に行ける相手に、「すみません言ってみただけなんです」は通用しない。

「代償が命？ それじゃあ、やり直したところで何の意味が……!？」

幻と思ひ込み、やり直したいなんて軽々しく願ったばかりに。なんてこった。

「——そうだ。やり直すのはこれからか。仮に売買契約であつたなら、購入したのは『やり直し』であつて『子供時代に返ること』ではない。つまりまだ、『商品』を受け取ってはいない」

だとすれば、支払い期限はいつだ？ 対価の内容からして、先払いは無理だぞ。

俺の願いは……『あの日から今日までずっと間違えてきた、さまたまなことをやり直してみたい』。これか。なら多分、俺が最初に間違えたと認識している『あの日』が始まりで、牢獄で息絶えたと思しき『あの瞬間』が満了日だ。思い返すと、あの子猫には頭の中で話しかけていたし、明確な日付を言葉にせずとも伝わっていただろう。

事前に二度目の終焉を予約済みとは、俺って段取りがよすぎというか、ろくな死に方をしない星回りのもとにでも生まれたのだろうか？

「この記憶の持ち主の人生はどうだったんだろう。亡くなった記憶はないけれど……って、あの猫、絶対あちらの世界に詳しいだろ。攻略本で」

子猫の正体はともかく、こうなったからには生き直す以外にない。ならば今後取るべき行動はハッキリしている。

継母を罵倒するな。

弟妹を虐待するな。

真面目に勉強しろ。

要は前回と違うことをやればだいたい正解ってことだ。

ただしヒロインの関わり次第で、ストーリーの強制力とやらが俺に悪役の轍をなぞらせようとする展開になるかもしれない。彼女の登場は何年も先とはいえ、回避策を今から練っておくに越したことはないな。

俺は頭を抱えていた手をひっぱがし、顎と腰に当ててゲームの記憶を掘り返し始めた。

まず、ヒロインの名はアンジェラ・ローザ。

歳は俺よりひとつ下の、隣国エテルニア王国の男爵令嬢だ。

基本は魔法のない《天使と愛の輪舞を》の世界において、彼女だけは不思議な癒やしの力を持っている。

エテルニアは牧歌的な小国ながら、永遠の愛と豊穡の国として広く知られ、天使の祝福を受けた地という伝説が残っていた。それが実際にあつた出来事だと証明するかのように、彼女は物語後半

になると、強力な祝福の力を発揮する展開になる。

ヒロインの入学時点からストーリーが始まり、攻略対象は全部で五人。そのうち四人は学園に集中しており、登場時点では幼かった少年も、やがて大人のイケメンになるのだ。

全ルートをクリアしたら逆ハーレムルートが解放。まあこれはヒロインがまともな女だったら、現実には選ばないだろう。

「と、思いたいんだが……怪しいな？」

俺が食らった全員集合での悪役糾弾つてさ、逆ハーエンドのワンシーンなんだよな……

あのゲームは人生初推しのアレッシオが存在したこともあり、『俺』の中では殿堂入りゲームに分類されていた。けれどよくよく思い返してみれば、肝心のヒロインに感情移入できたためしはなかった気がする。

どちらかと言えば、あんまり好きじゃないタイプのキャラだった。

善良で性格が良い少女のはずなんだが、どうしてだろう。妙に引つかかるし、逆ハーやるんじゃないか？ と半ば確信してしまうのは。

「ん……思い出せん。彼女にはほとんど興味がなかったからな……」

ヒロインの印象が一番薄くて記憶が曖昧とか、乙女ゲーム開発側としてあるまじき事態だ。

しかしイレネ達の件と同様、前回と異なる道を進みなければ、ヒロインと敵対してはならない。己の感情は脇に置いて、ベストは仲良くなることだろう。

そんな彼女と恋を育むかもしれない攻略対象、栄えある一人目は我が義弟^{おとうと}ジルベルトだ。

ゲームでは学園を中退してなくなった彼をヒロインが捜し出し、妹を喪って絶望しているところを慰める。

二人目はニコラ・ヴェルデ、貧乏子爵家の息子。優しくて気弱な学園の臨時教員。

三人目はラウル・アランツォーネ、男爵家の息子。小柄な自分の見た目すら利用する、大商会の天才児。

四人目はルドヴィク・ヴィオレット、公爵令息。ミステリアスな雰囲気を漂わせ、常に双子の妹ルドヴィカと一緒にいる。俺が敵対していた公爵家とやらはこいつの家くさい。思えば俺を拘束したのは警官隊ではなく、ヴィオレット家の紋章を掲げた騎士団だった。

最後に『俺』の推し、アレッシオ・ブルーノ。あの牢でジルベルトの次に俺を見に来たのは、間違いなくこの男だ。攻略対象の中でルックスはトップ、能力も唯一『チート』と明記された男。しかしこの人物のルートは、ファンの中では賛否が分かれていた。

——彼は、ゲイだ。

恋愛対象は同性。バイでも異性好きのオネエさんでもない。

マジかよ、攻めたな、と『俺』は思ったものだ。

アレッシオは尊敬していた父が亡くなって以来荒れた生活を送り、昼は学園の生徒、つまりヒロインの家庭教師をしながら、夜は賭博場で働いている。

彼が毎夜どこに行っているのか気になったヒロインは後を尾け、そこで男同士のラブシーンを目撃。その片方がなんとアレッシオ先生だった……という展開だ。

このルートが一部ファンの間で地雷を量産した。このゲームじゃなく別のゲームでやれ、ヒロインのせいで袖にされたモブ男が可哀想だ、などなど。

実にごもつともだ。俺もヒロインがアレッシオとくつついた時は、なんかモヤったしな。バッドエンドに進んだら、裏社会の闇に触れすぎた彼が始末される展開になっちゃうもんで、モブ男くんには去ってもらうしかなかったんだけどさ。

だけど、俺に比べればモブ男くんなぞまだマシだぞ。

俺の役割は何だ？ 悪役令息だ。

それも、全ルートにおける悪役トップの悪役令息だ。

顔すらないモブ男くん以外、ライバルキャラが影も形も出ないこのゲームにおいて、唯一にして最大の悪。

ある時は貧しい子爵家に借金取りを押しかけさせ、ある時はゴロツキを雇って男爵家の経営している店舗を襲撃させ、またある時は公爵家の領地に危ない薬を蔓延させ。

アレッシオの時は、彼の父親を死に追いやったのが俺ではないかと疑われた。

父の死を事故で片付けられた彼は納得がいかず、俺の悪事の証拠を掴み復讐するため、家庭教師として学園の生徒から情報収集をしつつ、俺が裏にいと噂の賭博場に従業員として潜り込んでいたのだった。

……あのさ。言わせてもらっていい？

『『オルフェオ』、ものすごく働き者だな？』

いったいおまえはどここのファミリーのドンだ？

かつて『俺』が『悪役令息オルフェオ』を不憫と断じた、その理由がまさにここに関わってくる。

先代ロッソ伯爵には息子が二人いた。長男の名はアンドレア、次男がフェランド。アンドレアは典型的な放蕩息子で、泥酔した挙句に階段から落ちて亡くなった。

フェランドが前妻エウジェニアと結婚した時点で、彼女はアンドレアの子を身ごもっていた。それがオルフェオだ。つまり彼はフェランドの実子ではなく、実際は甥に当たるのだ。

——という裏設定があった。

十中八九、これら『諸事情で表に出さなかった設定』は現実に応用されている。何故ならば、俺は隠し攻略対象になる予定だったからだ。

その伏線は名前にも残っている。

メインキャラの苗字は全員が色を意味し、瞳や髪がその色になっていた。

ロッソは赤、しかし攻略対象のジルベルトは金髪に空色の瞳で、俺は髪も瞳も鮮やかな赤。

大概俺も自業自得だが、山積みされた冤罪に関しては、この幻のルートのためにシナリオ班が用意したものとは思えない。

多分だが悪役令息を救済することで、彼を追いつめた他の五人のルートがなんだったんだという空気になり、下手をすればアレッシオ以上の地雷ルートになりかねないと判明して、闇に葬ったのではなからうか。

「そして設定だけが残ったというオチか。なんという衝撃の事実……」

ファンから『金太郎あめ悪役』という不名誉な称号をいただき、ファンサイトでも商品レビューでもけちよんけちよんに貶されているのを見かけるたび、『俺』は「こいつ憐れやなあ……」と涙を禁じ得なかったわけだが。

それが俺って、ホントどういうことよ。

いきなり生えたゲーム知識のせいか、いまいち現実感薄いけど、ついつい遠い目になって溜め息をついちやうね。

「だがまあこの先、恵まれた環境を棒に振るバカにさえならなければ、悪役の条件は一気に回避できそうか。ひとまず気にすべきはその点だけだな」

方針が定まったところで、今は何年の何月何日だろう。

俺は再度、部屋の中をぐるりと見回した。

家具も壁紙もカーテンも覚えてる。ロッソ領の本邸に住んでいた頃の寝室だ。あのドアの向こうには居間のような部屋があり、さらに奥の続き部屋は勉強部屋として使っていて、机や本棚、それに授業用のテーブルが置かれていたはずだ。

しかしこの寝室だけでも、かなり豪華で広い。ダブルサイズぐらいのベッドが置かれてもおお、スペースにはかなり余裕がある。

なんだか妙に落ち着かない。庶民の『俺』が入って感覚が変わったせいだろうか。

「おっと。こういうのは身体に染みついているんだな」

絨毯を踏む感覚に違和感を覚え、視線を下に向けてみたら、無意識に室内履きへ足を通していた。

スリッパではなく、豪華な上履きみたいな靴だ。家の中で靴を履いていても平気だなんて、記憶や性格が『俺』に変わろうと、これはやはり俺自身なんだな。

カーテンの隙間から白く明るい光が漏れこぼれている。最低限の灯りしかない地下牢獄は、昼夜問わず暗かったせいで、かすかな光でも随分と眩しく感じた。

こんな白い光は久しぶりだ……いや、だから浸っている場合じゃない。

——向こうの部屋に繋がるドアがコンコン、と鳴った。

しまった、もうそんな時間なのか。

「坊ちゃま、お目覚めでしょうか」

「あ、ああ。入れ」

「失礼いたします」

ほぼ反射的に答えたら、入ってきたのは若いメイドだった。

ベッドの中ではなく、何故か姿見の前で突っ立っている俺を彼女は怪訝そうに一瞥し、カーテンを開けに窓へ向かった。

十三、四歳ぐらいの娘だ。煉瓦色の髪に萌黄色の瞳。ふわふわの髪を後頭部で団子にし、黒いリボンを結んでいる。鼻から頬にかけてそばかすがあり、なんとなくそれが魅力的に感じた。

確か俺に朝の支度をさせるのが彼女の仕事で、この時間ばかりはノックに返事がなくとも勝手に入室してきたはず。あまり覚えていないけれど、こんな顔立ちだったかな。

というか俺、顔と名前が一致している使用人って何人ぐらいいたっけ。

昔はずっと大きな女に見えていたのに、実際は小柄でほっそりとしたメイドだったのか。一度成人した記憶があるせいかな、自分より背が高い彼女の小ささがわかる。

カーテンが全開になり、室内はいつそう明るくなった。

格子窓の外で庭の木々の清々しい緑が輝き、はっと胸を衝かれた。

……こんなに、綺麗な眺めだったのか。

「坊ちゃま、こちらにどうぞ」

ベッドから離れた板張りの床に、小さなテーブルと椅子が置かれている。メイドはそのテーブルの上に水を張った洗面器を置くと、俺に声をかけて椅子を引いた。

寝室で絨毯が敷かれているのは寝台周りだけで、床板部分には水をこぼしても構わない作りになっている。

ベッドに背を向けて椅子に座ったら、彼女は俺の首から足元までを覆う防水布をかけた。薄手の布の表面に蠟か糊を塗っているもので、下着まで濡れるのを防ぐ。

俺は軽く腕をまくって顔を洗った。びしゃびしゃになった床はあとで清掃係が拭くし、湿った寝間着と防水布は籠に入れておけば洗濯係が回収する。

これが俺の日常だったはずなのに、いろいろと違和感がすげえ。

洗顔を終わると、横に控えていたメイドがやわらかな布で顔の水気を拭ってくれた。そして芸術作品のように美しいガラス瓶から、小さな綿布へ液体を垂らし、頬や額に当ててくる。

化粧水だ。なんていい香りなのだろう。地下牢の悪臭に慣れた身には、まさしく天上の香りだ。

深く息を吸うと、メイドに小さく笑われてしまった。

「緊張しておられますか？」

彼女の声にバカにする響きはない。優しい姉が弟の不安を払拭してやるような、どちらかといえば好意的な声だった。

こんなに優しく語りかけられていた時代が、俺にあったのか。

怪物と化して暴れ出す前は、皆こんな感じだったのだろうか。

我が儘は我が儘でも、まだ子供だからと許されるレベル。おそらく今はまだ、その段階にいる。

……それより、緊張だど？ もしや今日は『あの日』なのか？

俺はメイドを見上げて首を傾げた。

「何のことだ？」

「ふふ、失礼いたしました」

だが彼女は軽く微笑みを浮かべるだけで、それ以上は口にしない。

いや、そこで引き下がらないでくれ。参ったな、子供の強がりとも思われたか？

余計なお喋りをだらだら続けない良いメイドだが、もっと情報をくれないのか。俺、本当に知らないんだぞ。

あの日がいっつ頃だったのかハッキリわかるのは、実母が亡くなって一年後、当時九歳だった——そのぐらいだ。

巻き戻った初日に、ぶっつけ本番の顔合わせなんて勘弁してほしい。

俺はメイドに不審がられないよう、表面上は澄ました顔で、内心ウンウン頭をひねる。相手の苦手なものを押し付けけないのは鉄則として、好印象を与えそうな話題ってなんだ？

思い出せオルフェオ・ロッソ。これから家族になる相手だ。何が喜ばれ、避けたほうがいい話題は何か、ひとつぐらい聞いているだろう。父上はなんと仰っていた？

「……………」

「坊ちゃま？ どうなさいました？」

「ああ、いや。なんでもない」

いかん、考えすぎていつの間にか眉根が寄っていた。結局不審がられてしまったな。

妙な様子の坊ちゃまを見て不思議そうにしながらも、彼女は俺の顔の手入れを済ませ、綿布や化粧水を棚に仕舞い、テーブルを拭き始めた。俺は椅子から立ち上がり、てきぱき働く少女を眺めながら、ともすれば再びシワが寄りそうな眉間を軽く揉んだ。

まずいぞ。さつつぱり思い出せない。これは多分焦っているせいだな。あとで落ち着いたらポンポン思い出せるようになるやつだ。

とにかく、万一過去の悪感情が蘇ってきたとしても、それを表に出すな。きつと今なら、昔と違って上手に隠せるだろう。

そんな風に俺がほんの少し考え込んでいる隙に、メイドはてきぱきと俺の寝間着を脱がし、てきぱきと服を着せ付けてしまった。あれ、いつの間に？

俺、身体はともかく心はピー歳なんです。十代前半の少女に着替えをすべてやってもらうのっ

てどうなんだ？

果たしてこれはアウトなのかセーフなのか。

無の表情で思考を巡らせつつ、準備されたブーツに履き替えていると、またコンコンとドアが鳴った。

「お着きになりました。皆様、下でお待ちです」

「はい、ただいま参りますとお伝えください」

メイドは俺の服にシワが寄っていないか最終チェックをしながら、ドア越しにかけられた声へ応えた。

—— あっ？ この会話、覚えがあるな？ なら、この次の行動は……

やつぱり。彼女はドアを開け、俺が先に出来るように少し脇へずれた。

そうだ、いつもなら自室に朝食が運ばれるのに、あの日はそれがなかったんだ。

そして俺は、「お着きになったって、誰のことだろう？」と首を傾げつつ、素直に階下へ……

「……？」

うん？ 何か引っかけたな。

引っかけたが、棒立ちしてはまた不審がられてしまう。

寝室を出ると、そこには記憶通りの部屋があった。豪華なソファセット、テーブルセット、寝室側の壁にある暖炉——その部屋にあるドアを開けてもらえば、外は廊下だ。

「どうぞ」

「ん」

俺を呼びに来た従僕がドアを開け、脇によけた。軽く頷いてそこから出ると、一步後ろを澄まし顔のメイドが無言で付いてくる。

何もかも、以前と同じだ……

懐かしい廊下感激している余裕はない。奇しくも俺は前回とそっくりな心境で、同じ表情を浮かべ、同じ行動を取っているのかもしれないと気付き、冷や汗が流れた。

俺はなるべく平然とした顔で歩く。どちらへ向かえばいいのか、訊くまでもなく覚えている。行き先は玄關ホールだ。誰かが到着して、皆が出迎えているとなればそこしかない。

玄關ホールは広々とした吹き抜けの構造になっていて、高い天井から吊るされた煌びやかなシャンデリアがあった。手すりの向こうにそれを吊るすための鎖が見え、そこから階段の下に視線を移すと、思った通り大勢の使用人が整然と並んでいる。

その中心、ぼつかりとあいた空間に、二人の男女が寄り添うように立っていた。

男のほうはよく知っている。亜麻色の髪をゆるく撫でつけた紳士。

フェランド・ロッソだ。

彼がパーティーの会場に足を踏み入れれば、その整った甘い顔立ちに、数多の貴婦人が頬を染めて群がるという。

それでいて公正で寛容な人柄が男性からも好かれ、紳士の鑑と呼ばれていた、まだ三十歳の若き伯爵家当主。

俺はそんな父にあっさり認められたジルベルトが憎く、そして羨ましかった。連れ子のくせに優秀な義弟に劣等感を抱き、自分を認めてくれない父に反抗ばかりして。

そうして、どんどん歯止めがきかなくなり、転落の一端を……

「オルフェ。何をしている？　こちらに来なさい」

俺に気付いた父上が、こちらを見上げて言った。

俺は仕方なく一段、一段、階段を下りてゆく。その足は、鉛で固めたようにズシリと重い。

父上の隣にいる女性——金髪の貴婦人は、そんな俺をどこか不安そうに見つめていた。

改めて見ると、彼女は実に美しい女性だ。

輝く髪をゆるく結び上げ、シンプルな白銀の髪飾りで留めている。髪飾りに嵌まっている小さな石は瞳の色に近い空色で、ドレスもまたそれに合わせた空色だった。

清楚で、優しいで、寒色なのに冷たさがない。むしろ陽光の暖かさを感じる。

甘めの顔立ちの父上と二人並べば、そのまま額に入れて美術館に展示できるだろう。

いくら子供に戻っていても、俺の審美眼と判断力は大人並みだ。だから彼女が控えめに言っても驚くほど美しいことと、初めて会う義息子を見つめるまなざしが慈愛に満ち、同時に不安と緊張が見え隠れしていることにもすぐに気付けた。

そこに媚はない。彼女はただ、義息子に嫌われはしないかと、それだけを恐れている。

……俺はこんな女性に、あんな下劣な罵倒を吐き散らしたのか。

ざらりと、違和感が胸の奥を撫でた。

そもそも俺はどうしていきなり、彼女をあんなにも拒絶したのだろう。

思えば、おせっかいな客人に『あれは財産目当てに違いない』と仄めかされたのは、彼女に出会った後のことだ。この時点ではまだ何も聞いていなかったのに、初っ端から彼女を排除しようとしたのは何故だったのか。

ホルルの床に足をつけ、鉛の身体を引きずる心地で近くまで行くと、ドレスの陰に隠れた小さな子供が俺を見上げているのに気付いた。

母親そっくりの波打つ金髪に、不安そうに揺れる空色の瞳。肌は今の俺よりも艶やかな陶器のごとき白さで、頬は幼児らしい丸みを帯びていた。緊張できゅっと引き結んだ唇は、紅を引いていくとも赤い。

か弱くて細い、二歳下の子供。九歳の子供の腕力でも、簡単にひねりあげられることを俺は知っている。かつて実際にそれをやったからだ。大泣きするこの子を嘲笑いながら。

どうしてこんな弱々しい生き物に、あんな真似ができたのか――

思い出した。

思い出してしまった。

この二人について、俺は今日この日まで、何ひとつ聞かされていなかったことを。

そして理解した。

俺は――

「オルフェ。この女性はイレエネ、この子はイレエネの息子のジルベルト。おまえの新しい母親と

弟だ。仲良くしてあげなさい」

美しい女性の肩に手を置き、魅力的で社交的で家族想いと評判だった父上の笑顔が――

歪む。

初対面の家族。初めての挨拶。

だから笑えって？ この状況で？

無理だ。笑えない。これでどうやって笑えというんだ。

俺は相手を間違えていた。

俺の中の怪物が爪と牙で切り裂きたかった相手は、この母子ではなかった。

あの怪物が生まれた原因は、本当は――

「どうした、オルフェ？ 挨拶をしなさい」

「……申し訳ありません、父上。まさか自分に、新しい母と、弟ができるなんて……今初めて、聞きましたので……」

「それがどうかしたか？」

ギョッと目を瞠ったのはイレエネだ。父上と俺の顔を何度か見比べ、俺の顔色から嘘ではないと察したのか、口を手で覆っている。

イレエネだけではない。かつて主人とともに、出来の悪い跡取り息子への失望を漂わせていた執事のブルーノまでが、愕然として主人を凝視した。

そうか。みんな、俺がとうに聞いていると思っただんな？
そうだよな。普通は事前に説明があるものだ。

別棟に愛人を住まわせるならともかく、正式に妻子として迎え、これから同じ建物内で暮らそうというのに、説明のひとつもないほうがおかしい。

第一に、俺の母エウジェニアが亡くなったのは一年前。今は喪が明けた直後のタイミングだ。この時点で、既に常識と非常識のギリギリを攻めている。

喪中に愛人を連れ込む輩に比べれば、かろうじて常識の範疇ではあった。それでも慎重になるべき時期なのに、この男の悪びれなさは、皆の胸にも無視し難い違和感を植え付けたようだ。

前回はこの時点で俺が癪癪かんしゃくを起こしてしまったから、きっと誰もこれに気付かないままだった。「幼いおまえには母親が必要と思っただけでな」

先ほどと変わらぬ笑顔、変わらぬ口調。

いやいや、父上。もしや愛息子へ母親をサプライズプレゼントとか仰るつもりではありませんよね？

それって——彼女に対して、凄まじく最低ではありませんか？

「オルフェ。挨拶をしなさいと言っただろう？　いくら身内になる女性でも、礼儀はきちんと示さないか」

無反応な俺に焦れたのか、やれやれと言いたげな顔でハア……と溜め息をついた男に、せっかく閉じ込めていた怪物の檻が危うく崩壊するところだった。

これみよがしに全否定してくるこの溜め息を、あの頃、俺は何よりも恐れていた……

「……失礼しました。イレエネ様」

せり上がりそうになる何かをぐつとこらえ、俺は彼女の目を見上げながら言葉を絞り出した。すると一瞬、父上は奇妙なものを見たように眉を蹙ひそめた。

「そのような他人行儀な呼び方をせず、継母はは上と呼びなさい、オルフェ」

「あ、あの、旦那様、わたくしはよいのです！　オルフェ様、とお呼びしていいかしら？」

イレエネが慌てて割り込み——いや、挨拶に割り込んだのはこの男だったか——にこつと笑いかけてくれた。

「混乱なさるのは無理もないと思いますの。どうか、あなた様の呼びやすいように呼んでくださいましね」

「まったく……すまないイレエネ。この子は人見知りではなかったはずなのだが」

再び割り込んできた男の言い草に、イレエネの口元がひくりと引きつった。彼女は心持ちかがんでいたの、角度的に奴には見えなかったろう。

よかった、彼女は常識的な人のようだ。実は財産目当てが事実だったらどうしようかと、失礼な心配をしてしまった。

執事のブルーノは先ほどから視線が定まらず、顔色の変化も忙しい。

彼でさえそうなのだから、他の使用人も我慢できずにチラチラと視線をよこしてくる者がいる。

そこには傲慢で無慈悲なお坊ちゃまへの恐怖はない。前回とはまるで異なり、彼らは当主である

フェランドにこそ、何か信じられないものを見る時の目を向けていた。

——聞き間違いかしら？

——本気で仰っているの……？

そんな心の声が聴こえてくるようだ。己の耳を疑いたくなる気持ちはよく理解できる。

だがあいにく、この男は……俺に対し、ずっと昔からこういう男だった。

俺も確信したのはついさつきだから、偉そうには言えない。

思えば違和感は何度もあった。何がどうおかしいと明確に表現できないまま、前回の俺は肥大した怒りに呑み込まれて終わってしまった。

俺という醜態でどうしようもない怪物が間近で暴れていたせいで、皆もこの男のこういうところに気付く機会が訪れなかった。

——けれど今、流れが変わった。

そうか。さつき奴が一瞬浮かべた妙な表情は、俺が期待とは違う反応を見せたからか。

「仕方のない子だな。……朝食を用意させてある。食事のあとで庭を案内しよう、イレエネ」

「え、ええ、旦那様。嬉しいですわ」

息子に笑顔で話しかけたのは最初のうちだけ。それ以降は妻にだけ甘い笑みを向ける男に、イレエネは咄嗟に貼り付けた笑顔で返している。彼女は嫁いだばかりなのだから、表情が多少硬くなってもスルーしてもらえるだろうな。

それはともかく、おーい父上？ 俺はまだ彼女の息子と挨拶していないんですけど、お忘れです

かー？

「父上、お待ちください」

「なんだ、オルフェ」

「食堂には私の席も用意されているのでしょうか」

「当然だろう？」

「そうですか。せっかくなのですが、今回、私は遠慮させていただきます」

「何？ 我が儘はやめなさい。おまえの母を歓迎する席なのに、おまえが不在では意味がないだろう」

俺がいても、あなたにとつて意味はないでしょうに……叔父上。

白々しく思ったが、口には出さなかった。

「申し訳ありません、体調がすぐれなくて。……イレエネ様、あなたが我が家に来てくださって、とても嬉しいです。あとで落ち着いたら、私ともゆっくりお話をしてくださいね」

できるだけ誠意が伝わるように、しっかりイレエネと目を合わせて笑顔を作った。

ぎこちない笑顔になったけれど、結果的にはよかった。完璧に表情を取り繕えない子供の様子は、むしろ周囲には自然に映ったろう。あのブルーノの顔に、一瞬だけ俺への憐憫がよぎったほどだ。

現在の俺は周りに注意を払う重要性を理解し、前回の悪童時代より、表情や視線の変化をそれなりに読み解けるようになっていた。

前はそれらを蔑ろにして失敗した。同じ轍を踏んでなるものか。

「ええ、ええ！ わたくしも嬉しいですわ、是非、お話ししてくださいませね！」

イレエネは嬉しそうな泣き笑いを浮かべた。

俺に対する引け目が若干窺^{うかが}えたものの、緊張と不安から解き放たれた笑顔の前に、俺も先ほどよりすんなり笑みを浮かべることができた。

そして、次は。

「ジルベルト、だったね？」

「っ！」

微笑みかけてやると、聖画から抜け出た天の御使いさながらの少年はビクリと震え、ぎゅっと母親のドレスを握りしめた。

小さいし、細いし、臆病。牢獄で見下ろしてきたあの恐ろしい男と、これが同一人物とはな……顔を合わせた瞬間、あの恐怖が蘇^{よみが}って滅茶苦茶な態度を取りはしないか、なんて完全に杞憂だった。

もちろん面影はあるけれど、七歳だぞ？ 骨格も背丈も肉付きもおおよそ十年分の違いがあるから、もう完全に別人にしか見えない。

そもそも俺よりこの子のほうが怯^{おび}えているじゃないか。

少しでも天使を怖がらせまいと、慎重に距離をつめて片膝をついた。このぐらいの歳だと、たった二歳差でもかなり大きく感じるものだ。しかもこの子は十歳ぐらゐまで、同年代の子供よりかなり小柄だったからなおさらだろう。

きょとんと見返してくる天使の瞳の中に、初めて会う人への恐怖と、目線が下になった年上の少年への興味が混ざり合っている。

自分でもびつくりするほど、この子への拒絶や憎しみが芽生えなかった。

「私はオルフェオ。きみの義兄^{あに}になる。今日はちよつと、無理だけれど……明日になったら、ゆっくりお話をしよう。仲良くしてくれると嬉しい」

努力せずとも優しい声が出た。俺ってこんな声が出せたんだな。

返事を待っていたら、天使は目をぱちくりさせて、ポ、と頬を染めた。

そして俺をチラチラ見ながら、また母親のドレスに隠れてしまった。

「あらあら……」

隠れつつ、何度も顔をちょこんと出してはチラチラ見てくる。

小動物のごとき天使の行動に、イレエネはほっこり笑顔になり、見守る使用人達も心なしかほっこり……

「体調が思わしくないなら部屋に戻って休みなさい、オルフェ。ブルーノ、家庭教師にキャンセルの連絡を。では行こうか、イレエネ」

「……はい、旦那様」

あんたは水を差さないと退屈で倒れる持病でもあるのか、父上？

よそ行きの微笑みでフェランドに答えるイレエネも、ようやく取り戻した無表情で頭を下げるブルーノも、多分胸の中で俺と同じツツコミを入れたことだろう。

天使の言動は綺麗に無視かよ、と。

不調を訴える『息子』の身を案じる言葉ひとつなく、ジルベルトには一言すらなかった。

そう、あのジルベルトにさえ、一言も。俺より期待を寄せていたはずなのに。

「オルフェ様、お大事になさってね」

「はい。ありがとうございます」

最後にイレネの気遣いを受け取り、三人の背を見送ったあと、俺は心配そうなメイドの視線を背中に感じながら自室に戻った。

そうしたらドツと疲れが襲ってきて、吐いてしまった。



発熱による寒気と全身を苛む痛みに押し流され、俺は何度もあの牢獄の中に戻った。

冷たい石の上で膝を抱えながら己を責め続け、かつて苦しめた継母と弟妹に謝り続け、空腹と苦痛に耐え続けた。

何の咎もなかった人々を孤独と絶望に追いやった俺は、この地下牢こそが相応しい棲み処なのだと、すべてを受け入れ、泣きながら意識が浮上しては沈む。

ああ、俺はまだ、あそこから出られていなかったんだな。

当然か……

けれど、意識を取り戻した時に俺がいた場所は、地下牢ではなかった。

寝心地のいい寝台の上で過ごしながら、身体は徐々に回復していった。

そして前回と決定的に違う点が、ともすれば引きずり戻そうと狙ってくる過去の闇から、ずっと俺を守ってくれていた。

ロッソ邸に仕える人々の、心から案じてくれているまなざし。

目覚めれば必ず誰かがいて、喉が渴いていれば水を飲ませてくれる。

癪癪持ちのドラ息子に命じられたからではなく、当たり前前に心配し、当たり前前に弱った子供の世話を焼いてくれていた。

かつて自分で壊し、捨ててしまったものが、壊れずにそこにあった。

そうして熱も下がってきた二日目。天使の親子が、見舞いに訪れた。

「おにいさま……」

俺の寝ているベッドの横で、チビなほうの天使が、目と鼻を真っ赤にしてべそをかいていた。

苦笑しながら大きいほうの天使が教えてくれるには、まず「明日になったらゆっくり話そう」という約束が反故にされ、自分がちゃんと挨拶できなかったから嫌われたんじゃないかとグスグスし始めたらしい。

仕方なく「お兄様はお熱になったの」と本当のことを教えたら、今度は「にいしゃましんじやうの!？」と大泣きし始めたそうだ。

イレネの元夫は、風邪をこじらせて他界。父親の死因を覚えていた賢い天使は、泣きまくって体力が尽きて寝落ちし、起きて今ここ、だそうな。

「おにいしゃま。あのね。これ、おはな……」

ジルベルトは一生懸命、舌足らずに伝えてくれながら、可愛い花束を両手で掲げている。イレネが庭師に言い、この子が持てる大きさの花束にしてもらったようだ。

なんとか俺に手渡そうとしているけれど、ベッドが大きいのと、身体が小さいのとで、いかにも「うんしょ」と頑張っている様子が実にいじらしい。

声をかけようとしたものの、喉がひりついて声にならず、無理に話しかけるのはあきらめて、代わりにこちらからも手を伸ばしてみた。

「えへへ」

ぎりぎり届いた手で花束を受け取ると、ジルベルトは嬉しそうに笑い、イレネのドレスの陰に隠れた。そして顔だけひよこつと出してこちらを見ている。先日と違うのは、恥ずかしそうなのは同じでも、ちゃんと笑顔なところだ。

俺は子供に詳しいわけではないが、七歳だった頃の俺と比較しても、この子の身体は小さく、言動も幼く見える。

イレネの話によれば、元夫が亡くなったのは二年ほど前。下級貴族の未亡人、それも子持ちとなれば、さぞかし生活は困窮していたに違いない。

教師はもちろん使用人を雇う余裕もなかったとしたら、この子は母親以外に喋る相手がおらず、

それが原因で人と上手に話せなくなったのではないか。

フワフワな見た目以上に賢く、本人もうまく喋れない自覚があり、恥ずかしくて余計に引つ込み思案になったのかもしれない。イレネが励ましたのか、俺に対しては勇気を振り絞ってくれたようだが。

「さ、ジル。わかったでしょう？ お兄様はちゃんとお元氣になってくださいわ。お休みになるのを邪魔してはいけないから、そろそろ失礼いたしましょうね」

「あい。……おにいしゃま。はやく、おげんきになつてね」

聞き分けの良い彼はこくりと頷き、俺に向けてちんまりとした手を振ると、母親と一緒にちよこちよこ歩きながら寝室を出て行った。

……………なんなのだろう、あの天使親子。

前の俺、あれを罵倒したり暴力振るったりしていたのか。

有罪だな。投獄でいい。

俺を貴族牢ではなく重犯罪者用の牢へぶち込めと判決を下した裁判官、いい仕事をした。

しばらく花束を眺めてから、部屋の隅に控えていたメイドに視線をやった。

煉瓦色の髪のメイドはこりと笑い、俺の手から花束をすくい取ると、ワイングラスほどの花瓶を持ってきて、窓側のサイドテーブルに飾ってくれた。

ささやかだが、これだけでもぐっと部屋が明るい雰囲気になった。

さらに二日後の朝、怠さは完全に消え去っていた。節々にこびりついていた熱も引き、頭の芯から冴え渡っている。

カーテンの隙間から漏れる光の淡さからして、メイドが様子を見に来るまでにまだ時間がありそうだ。俺はもそりとベッドから下り、室内履きに足を通して、ふらふらと姿見の前に立った。

——この数日でやつれた、九歳の子供が見つめ返してきた。

「この子だつてこんなに小さいじゃないか？ 何をやっているんだあの男は」

なんかなあ。笑えてきたわ。

あんな男に認められなくて、あんなにも常軌を逸しためちゃくちゃな行動ばかり取っていたなんて、とんだ人生の無駄遣いだつた。

幼いはずの子供の面（つら）に、似つかわしくない冷笑が浮かぶ。

実母が亡くなつてわずか一年。喪が明けてすぐ、フェランドは新しい母親を連れて来た。

顔を合わせたその場で、いきなり「おまえの母だ」と言われた。

それまで一度もそんな話題が出たことはなく、心の準備ができていなかった九歳の子供は、感情を抑制するすべを持たず爆発した。

暴力的な怒りを、イレネに、ジルベルトに、のちに生まれたシルヴィアにぶつけ続けた。衝動は弱まることを知らず、周囲にも拡大し、小さな怪物は怪物のまま成長してしまった。

ロッソ家の息子としての義務を果たさず、散財し、家も領地も滅茶苦茶にして。

おかしいではないか？

そんなことになるまで何故、あの怪物はイレネ達を虐（しい）げ続けることができた？

あんなにも好き放題に暴れ続けられたんだ？

簡単だ。フェランドが止めなかったからだ。

あの男はロッソ家の王だ。あの男は俺を止めることができた。あの男にしかできなかった。

なのに、癪（かんしゃく）癪（かんしゃく）を起こす俺を目にして、あの男はどうしていた？

『ふう……何故あんな、不出来な子が生まれてしまったのか……』

深々と失望の溜め息をつき、やれやれと首を振り、周囲にそうぼやくだけ。

己が放置した結果、なるべくして愚かになった『息子』を愚かと呼んで幻滅し、だからといってどう矯正を試みるでもない。

幼いおまえには母親が必要？ ——おまえが美しい妻を欲しただけだろうが！

奴はいつだって、自分のためだけに行動している。

そして俺にとつて奴は父親でも、奴にとつて俺は息子ではなかった。

頑張つても頑張つても、努力嫌いと呼ばれた。

疲れて休んだら、どこからか「また怠けて……」と聞こえよがしに呟（ささや）かれた。

時々、どうしようもない衝動が抑えきれずに噴き出ることがあった。そんな時、周囲はあからさまに俺を見ながら、「血は争えない」と囁（ささや）き合った。

心の病（やまい）で隔離され、とうとう亡くなるまで一步も離れの寝室から出なかった母親のことを言っているのだと理解し、「一緒にするな！」とますます荒れた。

ちゃんと説明されてもいないのに、俺は彼女が隔離されているのを知っていた。訪れる客が声を潜めたフリで、俺の耳の近くで囁^{ささ}つていくからだ。

フェランドはそいつらに何も言わず、何もしなかった。むしろ愛想の足りない息子に失望のまなざしを向け、溜め息とともに言った。

『招待客にきちんと挨拶ができないのか？　いくら我が家が格上であろうと傲慢にならず、身分に相応^{ふさわ}しい礼を尽くしなさいといつも言っているだろう。もういいから部屋へ戻りなさい』

いつも？　そんなこと、父上から教えていただいたことなんてあつたっけ？　自分の頭が悪くて覚えていないだけ？

言葉を返せない我が子の答えを待つこともなく、フェランドはメイドに出来の悪い子を連れ出すよう命じ、その後はもう目もくれなかった。

そう。いつもそうだった。尋ねておいて、答えは聞かない。

俺は常にとてつもない不安と恐怖を感じていた。物を投げて喚^{わめ}けば、それがほんの少しだけ楽になった。

イレネとジルベルトを迎えた日、どこかでブチリと音がした。

「なんてことだ。私は相手を間違えていた。憎むべきはあの母子^{おやこ}じゃなかった。——あの男、最初から私を潰しにかかってたな……！」

腹の底が怒りで煮え立ち、奥歯をギリ、と噛みしめた。

しかしこうなると、母エウジェニアの心^{こころ}の病^{やまい}とやらも怪しくなってくる。不貞を働いた妻を夫が

幽閉、なんておどろおどろしい話は、残念ながら貴族あるあるだ。

彼女を隔離していた離れの建物は、縁起が悪いと何ヶ月も前に解体されている。つまり証拠はもうどこにもない。

「上等だ。きさまがそのつもりなら、こっちだつて遠慮はしない」

健気にお父様を慕う何も知らないお子様を、長年にわたってサンドバッグにしてくれやがって……！

「みうー」

「っー」

突然響いた細い鳴き声にビクリと震え、勢いよく振り向いた。

いつの間にかベッドの上に、ちょこんと白い毛玉が座っている。俺が寝ていた時は間違いなくいなかったのに。

「……おまえ、あの猫、だよな？」

「み」

子猫は可愛らしく小首を傾げている。

どこからどうやって入ったんだろう。神出鬼没だな。

「取り立てにでも来たのか？　慌てるな、その時になればくれてやるから。おまえはちゃんと約束を守ってくれたものな」

叶わないはずの『もう一度』をおまえは与えてくれた。

だから俺はこの二回目をまっとうし、きつと最期におまえの欲するものをあげよう。
心でそう語りかけると、子猫はもう一度「み〜」と鳴いた。

SIDE イレーネ

わたくしが生まれたのは、貴族の中ではごく平凡な子爵家のひとつだった。
両親はとても仲睦まじく、わたくしを心から愛してくれた。
意識しないほど当たり前に幸福な日々を過ごし、お父様が決めてくださった嫁ぎ先にも不満はなかった。

お相手は同じ子爵家で、穏やかで誠実な人。

大切にしてもらえて、わたくしはそこでも幸せになった。

そしてジルベルトが生まれ、ますます幸せになった。

ところが、平穏で幸福な日々はあつという間に崩れ去る。夫が騙され、借金を背負わされたのだ。使用人が一人、また一人と辞めていき、そのたびに家の中のものが減っていった。返済にあてられたのか、使用人の退職金なのかは判然としなかった。

不幸は立て続けに訪れる。両親が馬車の事故でいっぺんに亡くなってしまったのだ。さらに夫の実家からは絶縁され、どこからの援助も期待できなくなった。

わたくしは慣れない家事に四苦八苦。お腹をすかせている幼い息子ばかりを気にして、金策に駆けずり回る夫の異変に気付くのが遅れた。

夫は無理が祟^{たた}つて倒れ、二度と目覚めなかった。

ジルベルトにはお風邪と説明したけれど、本当は違う。

涙が涸^かれ果てるほど泣き尽くし、やがてどうにか顔を上げられるようになった時、わたくしの前には何ら改善されていない無慈悲な現実があった。

泣こうが喚^{わめ}こうが、わたくしは幼い息子と、夫の遺した負債を抱え、どうにか生きていかねばならないのだ。

この国の法では男子のみが継承権を持ち、成人となる十六歳の誕生日まで正式に爵位を継ぐことはできない。

亡き夫の子爵位が宙に浮いた状態で、その場合にどうするのが最善なのか、わたくしにはまったく知識がなかった。

そういえば領地はどうなっているのだろう。執事が辞めてしまいう前にちゃんと訊いておけばよかった。女主人として、役立たずこの上ない。

弱った獲物に、資産家の男が援助の話を持ちかけてきた。援助をしてやる代わりに、愛人になれと言う。

最初は断っていたけれど、次第に心が揺らいでいった。

そのうち落ちるだろうと確信している、厭^{いや}らしいニヤニヤ笑いをひっぱたいてやりたかったけれ